

川上神社の古代文字「絵文字」の考察

丸谷憲二

1 はじめに

川上神社(小田郡矢掛町小田有木谷)は、岡山県神社庁に登録されていない小さな神社である。矢掛町史にも記録されていない。この神社に絵文字が伝承されている。未だ解読されていない絵文字である。私は有木谷という地名に注目している。有鬼である。

「阿比留(アヒル)文字では無い」との野崎 豊先生の教示を受け、8月30日に御案内いただいた。



川上神社の古代文字「絵文字」

2 川上神社の絵文字

川上神社は、『矢掛町史本編・資料編・民俗編』にも記録されていない。川上神社の古代文字は「絵文字」である。「絵文字」は文字に先行する段階と説明される。つまり、「アルタミラ洞窟天井の指の跡」の次の段階の表記である。

絵文字とは「描かれた対象の意味を伝える単独の記号」である。川上神社の絵文字が神代文字であるならば、日本最古の神代文字の発見である。現在迄に公開されている神代文字と比較し、最古の絵文字であることを確認した。最古の神代文字「カタカムナ文字」の前の段階である。視力検査表(ランドルト環視力表:フランスの眼科医エドモンド・ランドルト(1846~1926)開発)のような絵文字である。

3 神代文字 説

「神代文字」で記録された太古文献(竹内文書・九鬼文書=春日文書・宮下文書=アソヤマ文字・東日流外三郡誌=津保化砂書文字 等)は現在の学説では偽書とされている。最古とされる『東日流外三郡誌』の9種類の「絵文字」等と比較した。一番近い絵文字がカタカムナ文字である。

3.1 カタカムナ文字

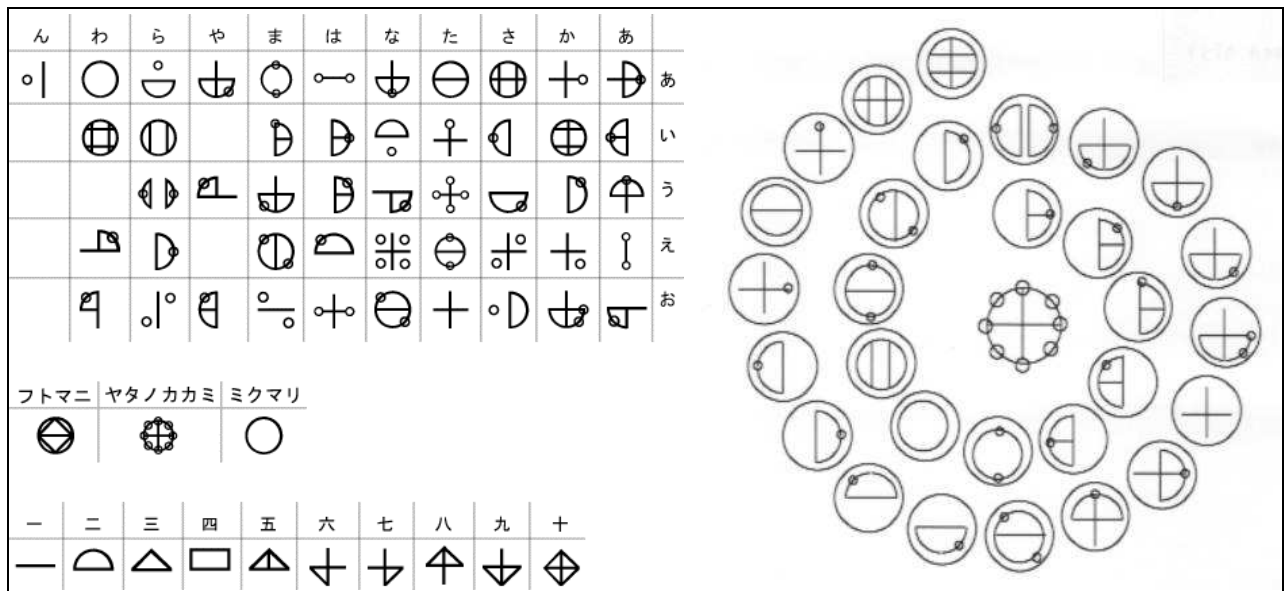
カタカムナ文字と呼ばれる神代文字がある。川上神社の神代文字に「カタカムナ文字(化美津之文字・八鏡之字)」が類似している。しかし、一致する文字は一字も無い。

3.1.1 カタカムナ文明

「カタカムナ文献」とは物理学者、^{ならさきさつき}榎崎皐月氏（1899～1974）がカタカムナ文献の原本を筆写し解読を行った。^{ならさきさつき}榎崎皐月氏の死後も相似象学会により研究、解読が進められた。

カタカムナ文字の原本は、1949年、兵庫県六甲山系の金鳥山において、^{ひらとうじ}平十字氏から「カタカムナ神社の御神体」として榎崎氏に伝えられた巻物である。榎崎氏は巻物を転写して解読を行った。平十字氏は「カタカムナの神を伝える家は、平家と食家（中家を入れて三家）の二つしかない」と語った。

榎崎皐月氏は巻物に描かれていた図形を見て、昭和19年(1944)頃、満州吉林での盧有三(90歳位)老子教老師の話を思い出した。「日本の上古代に、**アジア族**という種族が存在し、八鏡の文字を使い**特殊な鉄**を作り、さまざまな生活技法を開発し高度な文明を持っていた。それが神農氏により伝えられシナの文化のもとになった。秘かに日本に伝わっている」と。記号の形状が、「カタカナ」の「サ」や「キ」や「リ」や「キ」などの形状と類似していることや、渦巻状の図象のうちの 하나가 48個の異なる記号により構成されていることから、それらの記号が日本語のイロハ48声音に対応していると考えた。



カタカムナ図表（相似象学会誌『相似象』第3・9号）
カタカムナ声音符と「カタカナ」48音との関係

解読のポイント

- ① カタカムナ文字は時計回りで渦巻状に記され中央から読み進める。
- ② カタカムナ文献は全て簡潔な歌で表されている。
- ③ 渦巻きの中央には「ヤタノカカミ」「フトマニ」「ミクマリ」と呼ばれる図章が記されている。
- ④ 二文字あるいは三文字が重なり合っ一文字の新しい字形を作る。

4 騎馬民族説 馬具 説

9月9日に田井広栄住職より「**馬具を図案化**している。先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額ではないか」との教示を受けた。馬具の^{あぶみ}鐙と馬銜^{はみくつわ}(轡)である。



奉納額



中段 木心鉄板張輪 鐙

5 世紀前半 滋賀新開 1 号墳



下段 楕円形鏡板付 轡

福岡 日拝塚古墳

『日本馬具大鑑 1 古代上』収録

4.1 鐙と馬銜(轡)

鐙は馬に乗る際の足がかりと、鞍の上に跨って乗馬中の体の安定を保つ機能を持つ「あしづみ」からきた名称である。

馬銜(轡)とは、馬の口に含ませる金属製の棒状の道具である。馬の口には前に 12 本の切歯があり、切歯の後ろはかなり広い歯のない部分がある。その奥に臼歯(奥歯)が並んでいる。この歯のない部分に馬銜をかける。騎手の手綱さばきはこぶしから手綱を通じて馬銜に伝えられて、馬を意のままに動かすことができる。

『古墳時代の馬との出会い』収録の「初期馬具の変遷図」と比較した。5 世紀前半～中葉頃の絵である。中央部が鐙、下部が轡(馬銜)である。

4.2 馬の日本への渡来

3 世紀末(280~290 年)に書かれた魏志倭人伝に「その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」と記録されている。弥生時代まで日本には馬が居なかった。約 6000 年前、中央ユーラシア草原地帯の人々は、馬を御するための画期的な馬具「馬銜」を発明した。

馬文化が日本に渡来したのは古墳時代、5 世紀初めのことである。馬の遺骸が確認できるのは 5 世紀中頃(西暦 450 年前後)、宮崎県六野原地下式横穴墓群 8 号墓から出土した馬で、轡を口に装着したままの姿で墓に葬られていた。その頃の馬は体高 120~130cm の小中型馬だった。

岡山県内では百間川沢田遺跡、上東遺跡、川入遺跡などで古墳時代の中型馬に属する馬が出土している。大阪府、和歌山県、奈良県などの畿内、岡山県が古墳時代の中でも、他の地域に先駆けて馬が出土している。

4.3 上部「左・上・左」「左尊位」から見える渡来時期

先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額だとすれば、何時、渡来したのかの記録が必要である。上部の「左・上・左」とは「左尊位」を意味している。「左尊位」から渡来時期を推定できる。大修館書店『漢語林』の説明では、「左右いずれかを尊位とする

かは、時代や国によって一様ではない。」中国では下記のように区分されている。

突厥国の東西分裂は583年である。川上一族の渡来時期は六朝時代の最後、583～589年頃である。突厥国の東西分裂による混乱により吉備（黄蕨）国へ渡来した。

左尊位		右尊位	
周 <small>しゅう</small>	紀元前 1046 年頃～紀元前 256 年	戦国時代	紀元前 403 年～紀元前 221 年
六朝時代 <small>りくちようじだい</small>	222 年～589 年	秦 <small>しん</small>	紀元前 778 年～紀元前 206 年
唐 <small>とう</small>	618 年～690 年・705 年～907 年	漢	紀元前 206 年～263 年
宋 <small>そう</small>	960 年～1279 年	元	1127 年～1368 年
明 <small>みん</small>	1368 年～1644 年		
清 <small>しん</small>	1644 年～1912 年		

5 有木谷の有木の考察

5.1 吉備（黄蕨）中山 有木神社

吉備中山は備前と備中にまたがり、両国の境に有木山が有り有木神社がある。治歴4年(1068)には有木神社の名は既に都に聞こえていた。明治初期の『一品吉備津宮社記』に「有木神社。有木山麓鎮座。祭神こちまろ巨智磨はりまのうじかのあた。一説曰、針間牛鹿直」とある。

『古事記』孝靈天皇段に「若日子健吉備津日子命(大吉備津彦命)の兄「ひこさめまのみこと日子寤間命」が針間牛鹿臣の祖」とある。



有木神社

備後 吉備津神社の社家は有鬼氏ありきである。大同元年(806)に備中吉備津宮を分社した時に、吉備中山の有鬼氏ありきより社家が来て元禄頃まで有鬼氏が宮司職であった。古代には祭祀権を持つ人間が政治権力を握っていた。中山神社(津山市一宮)『中山神社資料』の荷前(のさき)祭主は有木氏と東内氏である。荷前とは祭りの時に、神への供物を集める役である。

有鬼氏ありきから有木氏への変更は、「和銅六年(713)の制」によるものである。「機内と七道との諸国の郡、郷の名は好き字すを着けしむ」によるものである。

5.2 魏志倭人伝の「有鬼國」と有木(鬼)神社

『備前吉備津彦神社縁起』延宝丁巳(延宝五年・1677)の朱印有りに、

「モウ鬼・ツテウ鬼・シャクシャウ鬼トテ不知其数」とある。

『魏志倭人伝』に有鬼國うきこくと鬼奴國きよこくが記録されている。『先代旧事本紀大成経七十二卷本』

に「黄蕨前国一宮」との記録がある。「黄蕨前国一宮」とは、「有鬼國」の「有鬼神社」である。

『魏志倭人伝』は中国の史書『三国志』の「魏書東夷伝」倭人の条の俗称で、撰者は晋の陳寿である。3世紀後半に成立。倭国の記録は2～3世紀である。

鬼奴国の記録は、熊野本宮大社・九鬼宮司家の『九鬼文書』に注目している。九鬼家は大中臣神道の宗家で熊野別当宗家である。古代末、中世から近世にわたり日本最強の九鬼水軍を率いた名門（戦前は子爵）である。

	<p>『魏志倭人伝』 自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。 次有斯馬國、次有已百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、 次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、 次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、 次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、 次有奴國、此女王境界所盡。</p>
<p>『先代旧事本紀大成経七十二卷本』「卷第三 陰陽本紀」 「是齋元<small>あめのみたけ</small>神<small>お</small>不<small>お</small>同<small>あきつ</small>異国諸神無<small>あきつ</small>威、其法元也、先産<small>あきつ</small>十有三柱神等、先生<small>あきつ</small>天水建大秋津彦神<small>あきつ</small>（速秋津日子）、次生<small>あきつ</small>地水建小秋津媛神<small>あきつ</small>（速秋津比売）、此神坐<small>あきつ</small>黄蕨前国一宮<small>あきつ</small>矣、潤<small>あきつ</small>世界<small>あきつ</small>神、有<small>あきつ</small>威徳<small>あきつ</small>神、此二神者水方神也</p>	

5.3 有木谷 小田郡矢掛町小田

小田郡矢掛町小田有木谷は、川上一族 15 軒の谷あいにある小さな集落である。集落の東側に観音山(岩屋山)がある。山頂に八畳岩があり竜王を祀っている。南の安部山に安部清明伝承がある。矢掛町には鵜飼との地名があり鵜江神社がある。

5.3.1 大本鵜江神社と「鵜」

大本鵜江神社(岡山県小田郡矢掛町東川面)の祭神は吉備津彦命・宇良御玉命である。社伝に「吉備津彦命昇天、御遺骸を中山の南峰に埋葬する時に、御棺鳴動して一羽の鵜飛び出て、南方に翔る。其止まる処を鵜江神社とす」とある。

鵜江(うごう)神社が2箇所(小田郡矢掛町西川面字宮本と小田郡矢掛町小林)ある。『大日本史』に、「吉備津彦がこの国の賊を討つとき、賊が水に没して逃げるのを、楽楽森彦が泳いでこれを逐った形状が鵜のようであり遂に賊を捕らえた」とある。

鵜江神社(笠岡市神島外浦)は『延喜式』式内社である。鵜成神社(祭神 吉備津彦命 小田郡矢掛町宇内)もある。

5.3.2 鵜飼

鵜飼い・鵜飼・鵜養は、鵜を使ってアユなどを獲る漁法の一つである。歴史は古く『日本書紀』神武天皇条に「梁を作つて魚を取る者有り、天皇これを問ふ。対へて曰く、臣は

これ菟苴擔の子と、此れ即ち阿太の養鵜部の始祖なり」とある。鵜養部の記録である。

6 川上一族

古代吉備(黄蕨)国の川上一族の先祖について2説が考えられる。

6.1 熊襲の首長 川上梟帥

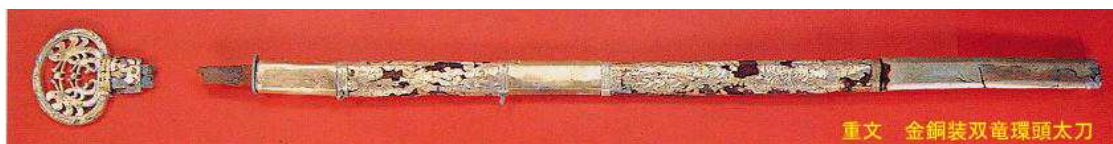
第12代景行天皇の皇子は幼名を小碓命おうすのみことといった。後の日本武尊である。武勇に秀でていた小碓命おうすのみことは、16才の時、景行天皇の命により九州に入った小碓命おうすのみことは、熊襲の首長川上梟帥たけるが祝事のため一族を集めて酒宴を催した日に、美少女の姿に変装して忍び込み、夜更けて熟睡する川上梟帥たけるに近寄って短刀を突き立て誅伐する。

川上梟帥は死に臨んで小碓命おうすのみことの武勇を讃えて日本武尊やまとたけるの号を献じた。こうして小碓命おうすのみことは九州の熊襲を平定した。『東日流外三郡誌』は、首長の首長川上梟帥たけるらを日本武尊やまとたけるによって討たれた熊襲が、比較的短期日の間に勢力を回復したことには、荒吐族の援助があったと記録している。

6.2 川上摩須良王と吉備津彦命

『久美浜町誌』(京丹後市久美浜町)に、川上摩須良王系図かわかみすらおうが収録されている。吉備津彦命との関係で注目したい。王者の谷(現在の久美浜町須田)に住んだ川上摩須良王。川上摩須良女は、丹波の平定を命じられた大和王朝の王族丹波道主命と結婚し、その子比婆須比売ひばすひめは垂仁天皇の皇后となり景行天皇を生んだ。

昭和56年(1981)10月、川上地区須田・伯耆谷古墳群の湯舟坂2号墳から、「金銅装双竜環頭太刀かんとうたち」(2例目)が出土し「国の重要文化財」に指定されている。



7 まとめ

- ① 川上神社の絵文字は、魏志倭人伝「有鬼國」の絵文字である。
- ② 川上一族の先祖は騎馬民族であり、渡来時期は六朝時代の最後583~589年頃である。
- ③ 川上一族の先祖は熊襲・川上梟帥たけるの末裔である。

8 謝辞

最後に、川上神社、有木谷の重要性をご指導いただいたに野崎 豊先生(神道考古学・神社考古学)、「馬具を図案化している。先祖が騎馬民族であることを記録に残すための奉納額ではないのか」との教示を戴いた田井広栄住職に深く感謝したい。

9 追記 吉備文字・忌部文字

- ① 『東日流外三郡誌』に、「ツボケの民が作ったという奇怪なオテナ石塔」を紹介している。聖なる三山の西に「石塔山いしのとう」と呼ばれる小高い山があり、大山祇神を祀った神社があ

る。その神域の 1km 四方に渡って奇怪な石塔がいくつか点在している。川上神社の裏山にも類似した石塔が存在している。(野崎 豊先生の教示)

② 神代文字として、原田実氏は吉備真備(693~775)が使ったとされる吉備文字を紹介している。南北朝時代の藤原長親は『倭仮字反切義解』で吉備真備をカタカナと五十音図の発明者としている。関連して忌部文字 3 種類を紹介している。

10 参考文献

- ① 『神代文字の謎』藤芳義男 1976 桃源社
- ② 『倭人伝原本漢文』<http://www.marino.ne.jp/~rendaico/yamataikoku/kanbun1.htm>
- ③ 『吉備の中山と古代吉備』薬師寺慎一 2001 吉備人出版
- ④ 『見てきたように解った 気になる有木史』有木俊統 2008 年
- ⑤ 『魏志倭人伝 解説』生野真好 2007 愛育社
- ⑥ 『矢掛町史 本編』昭和 57 年 矢掛町
- ⑦ 『矢掛町史 資料編』昭和 57 年 矢掛町
- ⑧ 『矢掛町史 民俗編』昭和 55 年 矢掛町
- ⑨ 『地球文字探検隊』浅葉克巳 2004 二玄社
- ⑩ 『古代日本の文字世界』平川南編 2000 大修館書店
- ⑪ 『文字の世界史』ルイジャン・カルヴェ 1998 河出書房新社
- ⑫ 『文字の考古学 I』菊地徹夫編 2003 同成社
- ⑬ 『古代文字』日向数夫編 1972 グラフィック社
- ⑭ 『原始日本語はこうして出来た』大室照明 2002 文芸社
- ⑮ 『よみがえる日本語』池田満監修 平成 21 年 明治書院
- ⑯ 『図説 神代文字入門』原田実 2007 星雲社
- ⑰ 『騎馬民族がもたらした日本の言葉』東巖夫 2009 露満堂
- ⑱ 『吉備津彦神社史料』文書篇 昭和 11 年 吉備津彦神社社務所
- ⑲ 『魏志倭人伝 解説』生野真好 2007 愛育社
- ⑳ 『気ままな久美浜写真日記』<http://blogs.yahoo.co.jp/gonngennsann629>
- ㉑ 『カタカムナは謎の古文書』http://www.jp-spiritual.com/kata_outline1.htm
- ㉒ 『カタカムナ』<http://www.h3.dion.ne.jp/~k-kagaku/index.htm>
- ㉓ 『カタカムナ研究』 <http://www3.ocn.ne.jp/~x484kok8/ktkm1.html>
- ㉔ 『謎のカタカムナ文明』阿基米得 1981 徳間書店
- ㉕ 『相似象』(第 3・5・6・9・10 号) 宇野多美恵 相似象学会誌
- ㉖ 『超科学書「カタカムナ」の謎』深野一幸 1993 廣済堂出版、
- ㉗ 『竹内文書が明かす 超古代日本の秘密』竹田日恵 平成 10 年 日本文芸社
- ㉘ 『定本竹内文献』武田崇元 昭和 59 年 八幡書店
- ㉙ 『超図解 竹内文書Ⅱ』高坂和導 1995 徳間書店
- ㉚ 『東日流外三郡誌の秘密』佐治義彦 1992 KK ベストセラーズ
- ㉛ 『九鬼文書の研究』三浦一郎 昭和 61 年 八幡書店
- ㉜ 『古墳時代を駆けた馬』<http://inoues.net/study/kofunuma.html>
- ㉝ 『馬具の種類(はみ)』<http://www.nagoyakeiba.com/qa90-3.html>

- 34 『馬のシルクロード』 2007 馬の博物館
- 35 『古墳時代の馬との出会い』 2003 榎柳原考古学研究所附属博物館
- 36 『日本馬具大鑑 1 古代上』 平成 2 年 日本中央競馬会
- 37 『古事記 日本書紀を知る事典』 武光誠 平成 11 年 東京堂出版
- 38 『古事記と日本書紀』 2006 西東社
- 39 『日本古典文学大系 67 日本書紀上』 昭和 42 年 岩波書店
- 40 「弥生時代の外洋船」 『騎馬民族のきた道』 留目和美 1996 刀水書房